

## 税所敦子の歌の淵源

佐伯裕子

新しい時代と古い時代が、火の匂いを放って擦れちがっていく、税所敦子はそのような瞬間を生きた女性歌人といつていい。幕末と明治、古い文化と新しい文化の交わるところで、古い精神が火花を散らして消えていこうとする瞬間を生きた女性である。

わたしは長いあいだ、税所敦子という女性を、明治天皇と昭憲皇后に仕えた宮廷歌人として知っているばかりだった。もう少し深く敦子の歌を考えるようになったのは、この四、五年のことである。女性歌人の系譜をたどるために、明治期の中島歌子や樋口一葉、下田歌子たちの歌とともに、まとめて敦子の歌を読んだのである。その際に、目に飛びこんできた一首があった。

うごきなきいはほにすみて萬代の龜は浮木を頼まざ

りけり 『御垣の下草』

『御垣の下草』は、明治二十一年に刊行された敦子の歌集で、そのなかに「龜」という題に寄せて作られた一首があった。歌題を与えられて作る題詠は、伝統的な和歌の作り方で、敦子の歌はほとんど題詠によっている。「龜は浮木を頼まざりけり」と、さり気なくうたわれている下句に、わたしは惹きつけられてしまった。

一首は、題詠であって題詠を超えているように思われた。右顧左眄せずに生きた女性の強い志が徹っている。どっしりとして、しかも繊細な志、優しい響きの和語「浮木」を用いながら、自らの意志と姿勢を伝えているのである。

文政八年（二八二五）に京都の錦織に生まれた税所敦

子の生涯は、ドラマかと思うほど波瀾にみちていた。幼少期から堂上派歌人の千種有功に歌を学び、太田垣蓮月尼とも交流があった。薩摩藩士の税所篤之の後妻となつたのは二十歳のときで、篤之には先妻の間に二人の娘がいた。二十七歳という若さで夫篤之の死に遭つてから、実の娘を伴つて、姑と先妻の娘と義弟の暮らす薩摩に赴くのである。京都から薩摩までの長い旅程の歌文集が遺族に残されていて、後々に世に出されている。『こゝろつくし』（昭和十一年刊）である。先妻の娘と自分の娘、姑、義弟の家族を含め十余人の世話をしながら、敦子はいつそう歌作りに励んでいった。

それから以降、島津家から近衛家へと取り立てられ、やがて、明治天皇と昭憲皇后に奉仕するまでになる。すべては、人徳と才媛ぶりが世に広まった成り行きからで、敦子が出世を望んでいたのではなかった。敦子は誘われるたびに、仕える主君を変えることに抵抗している。歌友の高崎正風の勧めによつて、重い腰を上げて宮中にも出仕したのだった。だが、ひとたび主君に仕えようと、敦子は誠心をもつて仕えきる。それが、「龜は浮木を頼まざりけり」の志だったのだろう。

ドラマのヒロインにもなりそうな生涯を、敦子は自然体で生ききつた。気負いというものが見えてこないのだ。

その点は、宮中に出仕して華族女学校や実践女学校を創設し、女子教育に力を注いだ後進の歌人、下田歌子の気概とは対照的であつた。歌子は明治の歌人だが、やはり敦子は幕末の歌人といった方がふさわしい。

古今集の流れをくむ敦子の和歌のなかで、わたしがかもつとも関心をもつたのは、新しいものへの旺盛な好奇心だつた。新しいものへ向かう柔らかな姿勢は、何に支えられていたのだろうか。西欧から移入された新文化を題にした敦子の歌には、新時代のなかで消えていく文化を残そうとする意志が見える。歌柄は一見静かなのだが、そこに敦子は、新旧の文化が出会う瞬時の激しい火花を散らせていた。象徴的な歌が、『御垣の下草』に収められている。

朝ごとにつどふおまへの濱千鳥けふはいかなる跡か  
見ゆらむ 新聞紙

子を思ふ心もそへて残さばやわがおちかのわすれがたみ  
に 寫眞

まがね道ひらけゆく世のためしには此車をぞひくべ  
かりける 蒸汽車

大君の御代はさかえて黒かねを道にしくまでなりに  
けるかな 鐵道

当時、「新題」といわれた文明開化の題を、敦子は出

来るかぎり和語に直してうたっているのである。だからといって、新時代を忌避しているのではなかった。むしろ進んで受け入れている。だが、その底を支えている精神は、いずれも、「大君の御代」の栄えを芯に置いたものだった、と読み取れる。

一首目は天皇が朝ごとに新聞を読まれる場面をうたったものだ。活字を「濱千鳥」の足跡にたとえて、天子が世相を見る「国見」に仕立てあげたもの。二首目は、写真という即物的な実写絵に対して、「心もそへて」と注文をつけている。さらに三首目、鉄道を「まがね道」と和語に表し、汽車は御世の栄えのために必要であった、と感慨を述べている。「蒸汽車」は、「むしげぐるま」とも読まれていた。また、「黒かねを道にしく」とは、つまり鉄のレールのことをいうのである。だが、「まがね道」などの優美な和語が死語になる日は眼前に迫っていた。

敦子は、苦心して、齒を食いしばりながら、「和歌」の神髄を守ろうとしたのではないだろうか。天皇皇后に捧げる歌、誉め歌として、新しい文明を和歌のなかに溶かしこもうとした。そういう生きかたを、敦子は生きたのである。だが、新聞、鉄道、蒸汽車……、それらは和語に直されると、たちまちに、それら自身のもつ力強さを失うものであった。

夫を失って薩摩に下る道中記『こ、ろつくし』に、次のような歌が残されている。

たちねのおやのいまさてうれしきはこのくるしさを  
を見せぬなりけり

蓮月尼から届いた消息への返し歌となっている。すでに母が亡くなっていることを嬉しいと思えるのは、現在の私の苦しみを見せないですむからだ、というのである。母親への強く深い愛情が伝わってくるだろう。

税所敦子の歌には、親や夫や姑、さらに主君、天皇皇后といった、自分以外の大きな存在に身を投じる歓喜のようなものがうかがえる。それが力となって、生涯にわたる敦子のエネルギーを生み出したといっている。身のうちの洞に中心をもつ歎び、西欧的な「愛」でもなく、「犠牲」「献身」でもない。それは、和語でしか言いえない、翻訳不可能な日本人のエロスといってもいい。わたしたち現代人が失ってきた濃密な力の根源を、遠く敦子の歌が見せてくれるのである。

注 引用歌は次の資料から引いた。

- ・『現代短歌全集 五巻 佐々木信綱編「御垣の下草」抄』（昭和五年刊・改造社）
- ・『こ、ろつくし』（陸奥広吉編・昭和十一年刊・非売品）

（歌人・「未来」選者・明治記念総合歌会常任委員）